会員の広場	2022年7月１日発行メールマガジン第２４号

シュロの話あれこれ

　先月の会員の広場に掲載された船橋の林さんの記事を興味深く読みました。
シュロは以前から気になる植物だったので、私もこれまで見た事、考えたことなどを先月号からのバトンを引き継いだつもりで書いて見たいと思います。
野鳥との関連ではヒヨドリがこの実を食べる場面を見た事があります。実はヒヨドリが丸呑みできる大きさの限界らしく、喉越しが苦しそうで目を白黒させていした。
実は固くて果肉が無く、種は排出して仕舞うので何が栄養になるのか不思議です。もしかすると実の表面が油脂分でコーティングされていて、それがエネルギー源になるのかなと思いました。カラスであれば実を楽に飲み込めると思います。いずれにしても鳥があちこちに種を散布するので、思わぬ所に芽生えて害木扱いです。このような実生を野良シュロというそうです。邪魔者を切って燃やそうとしても、焼け残って厄介です。束ねた新聞紙や分厚い本が燃えにくいのと同様で幹を幾重にも包んだ樹皮のせいだと思います。
野鳥の巣材として、特に保温性を高める内装に樹皮の繊維が使われているのを見ます。
ハシブトガラスが樹皮をむしり取っている場面、公園で植栽木を支柱に結んだ棕櫚縄を引っ張っている場面に出会いましたが、いずれも巣材集めだったと思います。
　シュロ縄は植木屋さんが竹垣を結ぶのに使います。ごわごわして扱いにくいものの、特殊な男結びにすると緩まないし、何により丈夫で長持ちするのが取り柄です。
なぜ棕櫚縄は野外で長期間風雨にさらされても腐らずに強度が保てるのか不思議です。
庭園樹としては葉の小さい唐シュロが好まれます。　和シュロは葉が大きくだらしなく折れ曲がるので庭木には向きません。北海道出身の知人が佐倉市内に戸建て住宅を買い、庭にシュロを植えたと満面の笑顔で話していた事がありました。寒冷地から内地に移住したので憧れていた南国的な樹種が植えられて嬉しかったようです。
　葉と葉柄を利用する蠅叩きがあります。70 年ほど前に私は実際に使っていました。
葉を細く裂けば干し柿を吊るす時の紐になります。インターネットで干し柿の作り方を検索するとビニール紐を使う方法ばかりですが、私には馴染めません。やはり棕櫚の葉が由緒ある正統派と思います。

葉を裂いてテープ状にしたものを器用に織ってバッタを作る人がいます。野遊びで子供にプレゼントすると子供より親が欲しがるほどの出来栄えですから、その技術を覚えたいと思いますが・・・
　寺院で除夜の鐘を突く棒もシュロの材が多いようです。
佐倉市　坂本　文雄

命のつながり

神　伴之（佐倉市）

佐倉の市民の森で、印旛沼探検隊さんが毎月実施している「もりのじかん」に会員でもないのに毎回のようにお邪魔虫で参加している。対象は小学校に上がる前の子供たちとその親。テーマも目的もなく自由に森の中を探検する。森の中にあるもの全てが対象だが、やはり大人気は虫たちだ。地に近いせいか、実にいろいろな虫を発見する。そして質問。あまり得意でない分野だし、予習もできないので、当然答えに詰まる。そこで印旛沼探検隊さんが考えたのが、「じんちゃんにしつもん」という題で質問を募集し、Zoomで答えるやり方。すると実に多様な質問が飛び出してきた。子供たちならではの質問が多いと思っていたが、後から聞くと大人も質問していたようだが、それも面白い。

幼い子供たち対象と言いながら、実はお父さん、お母さんが対象でもある。今、幼子の親たちは自然にどっぷりつかった幼児体験がない人が多いようだ。そこで、自然との付き合い方を子供たちと一緒に学ぶ場にもなる。もちろん質問の嵐の中で、私自身の学びの場でもある。そんな「もりのじかん」は時として、親たちの方が夢中になって虫探しをすることにもなる。

子供たちの一番人気はなんといってもゴキブリ、なんせ数が多い。ゴキブリと聞いてお母さんたちは「キャー」という人もいるが、実は「森の中で落葉やゴミを食べて、森をきれいにし、木や草に栄養になるように分解する役目をしていて、森には無くてはならない生きものだよ」というと、とても親近感がわいてくるようだ。その証拠に Zoom 会議にこんな質問が寄せられた。

④ゴキブリは冬何処にいるのか…？北海道には、いないらしいと聞いたから。

答「ゴキブリはもともと熱帯雨林にいたから、寒いのは苦手　2 億年前のペルム紀にゴキブリが出現したころの地球は暖かかった。家にいるゴキブリは全体の 1%　市民の森にもモリチャバネゴキブリがいっぱいいる。昼間は落葉の陰などにかくれていて夜活動する。（本にはこう書いてあるが、市民の森では昼間活発に活動している）　食べ物は落葉や動物の糞、死骸。家にやってきたゴキブリは残飯や、人間の垢や毛髪、油。冬は卵で越冬、一部成虫で越冬するものもいる。北海道には野生のゴキブリはいないけど、家は暖かいので家の中にはいるみたい。」

果たして回答があっているか、子供たちが理解したかはわからないが、その上で「じんちゃんの家ではゴキブリが出ると捕まえて、外に逃がしてやる」と言うと、お母さんからは「ばい菌をまき散らすのではないですか」という質問。「ゴキブリがばい菌を出すのではなく、家にあるばい菌のついたエサを食べるからばい菌がゴキブリにつく。家にばい菌がなければ、大丈夫」と答えるが、本当かな？？？

そうは言っても私の家には、ゴキブリの忌避剤は置いてある。きれいとは言えない家の中、外にいてくれれば、お互いに平和。

子供たちと森の中で遊んでいて、子供も大人も生きものと命がつながっていることを肌で感じることができるか。「可愛いから、貴重だから、命を大切にしようね。」ではなく、命がつながっているから、命を大切にする。希少種保護ばかりでなく、普通の生きものが命のつながりの中で大切な役割をしている、これを伝えたいのだが、なかなか難しい。子供たちが、普通に命を大切にする生き方をしていって大きくなれば、戦争をするような馬鹿な大人にはならないような気がするが。果たしてどうだろうか。

普通種もいいが、見慣れない生きものに会えるとやはりわくわくする。

ホソナガニジゴミムシダマシ

ウラナミアカシジミ

ムシたちの夏（夏空に舞う①：オオムラサキ）

オオムラサキは、蝶の仲間の中で**色の美しさ、大きさ、気の強さ**で群を抜いています。

梅雨の後半、雲の隙間に青空を見たとき「オオムラサキの季節が近い！」と気持ちが高ぶります。

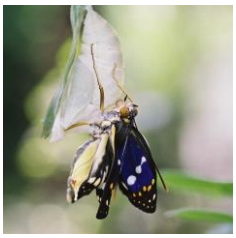
＜春の目覚め＞

春が来てエノキの若芽が伸びるころ、幼虫は冬眠から目を覚まし、木を登ります。若葉を食べた幼虫は褐色の皮を脱ぎ、緑色の体になります。つぶらな瞳のかわいい顔からは、夏空を雄大に飛ぶ姿を想像できません。

つぶらな瞳の幼虫

＜夏空に舞う＞

蛹は、エノキの葉に見事に溶け込む「新緑の術」を使います。自然光の中で蛹を見つけ出すのはとても困難です。見事に敵の目をごまかしたオオムラサキは、６月の下旬に羽化して、夏空に飛び立っていきます。



羽化

成虫のオスは、樹液を吸い終わると木のこずえの先に翅を広げて止まります。他のムシが飛んでくると飛び立ち、追い払い、元の場所に戻ってきます。
飛んでいる者なら大きさに関係なく何でも反応します。近くを飛んでいる鳥に対しても向かっていったのを見た時は、驚きました。

樹液を吸う

西野　孝法(千葉市

＜樹上のオオムラサキ＞

樹液酒場で樹液を吸い終わると、近くの木に翅を広げて止まります。

＜オオムラサキとの愉しい思い出＞

1978 年の夏、生物部の合宿（福島県）で、葉の上に止まっているオオムラサキと出会いました。
部員たちは、「採りたい」「近くで見たい」などと興奮して私に訴えてきます。手持ちの網では、彼の止まっているところに届きません。「諦めて観察しよう」というわけにもいかず、どうしたものかと考えました。その時、オオムラサキが近くを飛ぶムシを追い払っていたことを思い出しました。この習性を利用して彼の目の前に石を投げて誘い出して採ろうと考えました。石を投げると彼は、石に向かって飛び立ちました。そして大歓声が上がりました。

←
葉の上に止まっているオオムラサキ
2021 年撮影のもの

←
オオムラサキを誘い出そうと石を投げる私、
もしかしたら網を空振りしたところかも？

結果的にオオムラサキを網に入れることはできませんでしたが、生物部の部員たちに生き物との愉しいやり取りを体験させることができました。合宿の提案を快く受け入れてくれた生物部の先生とオオムラサキに感謝しています。

植物雑感『ナツツバキ』：夏椿。ツバキ科ナツツバキ属・Stewartia pseudo-camellia

私は健康の為もあり、毎日家の近所を散歩するのを日課にしています。コースには庭のある家が多く、庭木がある所では低いフェンス越に目の前で樹木の花が見られ、里山へ出かけなくても色んな花を見て楽しんでいます。

ナツツバキの花が咲き出しました。この花は梅雨時から 7 月にかけて咲き、その美しさに魅了されます。花は本年枝の葉腋に 5cm 程の白い花をつけ、花弁は 5 枚、ふちは波うち、細かい鋸歯がまばらにあります。外面は白い絹毛が密生する。樹皮はなめらかで 10 年程たつと古い樹皮が薄片状にはげ落ちて灰白色や赤褐色の大きな斑紋になる特徴があります。

別名はシャラノキ（沙羅の木）とかシャラ、サラソウジュなどとも呼ばれます。サラソウジュの名は平家物語の冒頭にある「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」で有名ですが、本来のサラソウジュはインド原産の熱帯のフタバガキ科の樹木で、日本には元々ない樹です。仏教に由来のサラソウジュの樹を日本人がナツツバキに見立てたか、または間違えたことによるとあります。ナツツバキは各地の寺院の敷地内に植えられ、寺院と親しい樹木として崇められています。

釜江正巳「花の風物詩」の文章の中に、花は一日花であり、花の命は短く、それがこの花の定めであるだけに見る人の心に響く。青苔の台地の上に日に日に落ちる、美しく咲いてはかなく散っていくナツツバキは、日本人の無常観にピッタリの花である。とありました。

私は植物を趣味で始めた頃に本物の沙羅双樹の木の花が見たく、調べても国内ではなかなか見られない状態でしたが、東京都の夢の島熱帯植物園で 5 月の連休だったと思いますが、花が咲いていると確認が取れ、飛んで行って写真を撮ったのが思い出されます。沙羅双樹の木の花は白とか黄色の小さい花でナツツバキと比較したら圧倒的にナツツバキが美しいです。今ではネットで見られます。新宿御苑の温室には仏教三大聖樹として、沙羅双樹（シラソウジュ）はお釈迦様が涅槃に入られた時に四隅に咲いてた樹。無憂樹（ムユウジュ）は仏陀の誕生の樹。菩提樹はインドボダイジュだが、釈迦が悟りを開いた樹で、三種が並んでます。

ナツツバキの種小名は「プセウドカメリア」となっている。プセウドとは偽（にせ）という意味からナツツバキは偽のツバキになっています。ナツツバキは気の毒にも偽のサラノキと偽のツバキという二重の偽者にされている。

「沙羅双樹　しろき花ちる夕風に
**　　人の子おもふ　凡下のこころ」与謝野晶子**

近縁種にヒメシャラがあります。ヒメシャラはシャラ（ナツツバキ）より花や葉が小さいことに由来します。開花も早い。ナツツバキの花は縁がギザギザだが、ヒメシャラの花はギザギザが少ないです。箱根や天城には多くあります。

小島紀彦（我孫子市）

水生植物　アサザ　オニバス

水元公園の「A18 号池のオニバス」「ごんぱち池のアサザ」は 都内唯一の自生地だそうで観に行きました。

2022.6.14　アサザ

アサザはミツガシワ科アサザ属の多年草。浮葉植物で根茎を水底の地中に伸ばして固定します。根茎は横走し節からヒゲ根を出して広がっていきます。葉を節から長い茎を伸ばし水面に浮かべます。浮葉の表面は陸上の植物と同じように乾燥を防ぐクチクラ層が発達して光沢が有り、濃緑色でハート形をしています。普通、植物は呼吸のために、葉の裏がわに気孔を持っていますが、アサザの葉裏は水に接しているので表側の葉に気孔があります。そこから CO2 を取り込み光合成し、また酸素を取り込み、茎を通して水底の根に送っています。アサザはこのような通気システムを持っているため、アサザ群落の下の水底には酸素が根から供給されます。このように水生植物の抽水植物（ヨシ ガマ）や 浮葉植物（スイレン オニバス）は、体内に通気組織を発達させ、シュートから根への酸素供給（給気）を行うことで、嫌気性有害物質から根を保護すると共に根の呼吸が維持出来るのです。花は夏から秋にかけて咲き、5 枚に分かれた花弁の縁が糸状に裂けた、黄色い合弁花です。朝に開いて午後にはしぼむ半日花。アサザは「異型花柱性」という独特の繁殖様式を持っています。花柱（めしべ）が長くて雄ずいの短い「長花柱花」と、反対に花柱が短く雄ずいが長い「短花柱花」を持つ個体が存在し、異なる花型を持つ花の間でハナバチ等の力を借り、花粉がやり取りされないと正常な種子が出来ないとのことである。ごんぱち池のアサザは種子が出来るのだろうか？ 種子は翌年に発芽するほか、埋土種子となって、数年間休眠することもあるそうだ。【近年、湖沼、ため池、河川、水路、水田などの水域で生息、生育していた物が姿を消し、 絶滅危惧種が続出する環境であることが明らかとなっている。人間活動の影響で 水質汚染、湿地は埋め立て宅地化、小川は側溝へ、近代的農業への転換で田んぼは 湿田から乾田へと姿を変え、水域での生物の生育環境が悪化、または消滅し、水生植物を始めとする水生生物は非常に高い絶滅の危機に瀕している。】

2022.6.14 オニバス幼葉

オニバスはスイレン科オニバス属 一年草。直径 1cm ほどの種子から、たった 1 年で大きな葉（浮葉の葉身の直径は 0.3-1.5m 程に、大きい物では直径 2.6ｍ の記録もある）を広げ、７月から９月にかけてトゲに包まれた蕾から鮮やかな紫色の花を咲かせます。水底の地下茎から根を張り、また地下茎から葉柄を伸ばし、芽生えの初期の葉は沈水葉で針状から矢じり形、始めの浮葉も基部に切れ込みのある長楕円形（写真）、10 数枚目の葉から楯状の円形になる。その葉の表面は光沢があり、著しいシワと葉脈上にトゲがあり、裏面は鮮やかな紫色で 空隙が多数ある肥厚した葉脈が隆起して網目状となり、凸の部分に空気を溜め、葉の浮力を確実なものとしている。古くは普通種であったが 激減し、日本では絶滅が危惧されている。天敵はザリガニや亀等、ザリガニを食べる肉食性魚類が生息できないとザリガニが増えオニバスが絶滅する。A18 号池でも近年オニバスが生育しない年も有り、水辺の里では殆ど水が無い状態にして、茎を切ってしまうザリガニを鳥に食べさせ、ザリガニがいない状態で飼育を試しているとのことでした。オニバスの種子も少なくとも数十年の寿命を持っており、泥の中で発芽できるチャンスを待っているという。水元公園では戦前から小合溜井一帯に自生していたが都市化が進み絶滅したと思われていたが 1981 年に A18 号池で発見され、1984 年には全体を覆う程になり、東京都の天然記念物に指定されました。同公園では７月に入るとオニバス池、ごんぱち池のアサザの一般開放が始まります。　　船橋市　林信子

暑くても外が好き

小坂　裕子

まだ６月なのに今日は３５度の暑さ。今年も記録的な暑さになりそうです。人は日陰に移動したり建物の中でクーラーを使用し生活できるけれど、動けぬ木々たちには辛いことでしょう

我が家の庭のカエデの木は、こう言っているかもしれません「冬も暖かいし、雪も降らないし、私たち落葉する意味があるのかしら」と、そのうちカエデの葉は、秋に紅葉せず落葉もせず　ヤシの葉のように　硬くて艶々になるのではないかしら・・・

職場の子ども施設にて　３～６才さんの子どもたちに、外で遊ぶか室内で遊ぶか聞くと、ほぼ１００パーセント　「外で遊ぶ！！」というお返事。「室内で遊びたい」と言ってほしい私の願いも空しく、３～６才さんたちは、寒い冬も猛暑の日もお外が大好き、子どもたちが室内でも楽しく過ごせるよう室内の環境を工夫しても　外の自然環境には適いません。ただし、子どもは子どもでも　小学生になると、徐々に、外より室内でゲームしたいな、暑いから出たくないなという子も増えてきますが、６才以下さんは、本能の何かが作用しているのか、とにかくお外が大好きです。

家族の小さい世界しか知らなかった三才さんたち　四月に入園し　四月中は、大泣きしたり、外でいつまでも遊びたくて保育室から脱走を試みたりする子もいましたが　６月になるころには園の生活にも慣れて　園のお友達　先生とのやりとり　好きな遊びをエンジョイしています。ある年の６月ごろ　誰とも遊ばず遊べず、うなだれて歩く三才くんに、声をかけていると、塀に一匹のハエトリグモが！

実際の出来事を描きましたが。塀から葉にアレンジしました。